

「義犬」の墓と動物愛護史

小佐々 学¹

はじめに

「義犬」とは、飼主やその仲間のために命がけで行動したり、そのために殉じた犬たちのことで、我が国では古代から明治時代まで使用されていた由緒正しい言葉である。このように、飼主やその仲間のために強い自己犠牲を伴う献身的な義犬の行動は、飼主やその仲間から常に信頼されて多くの愛情を注がれていたためであり、したがって義犬は究極の愛犬であり伴侶犬ということができよう。^{1,2)}

日本ではアニミズムや多神教的な感性にもとづく神道や、衆生(有情)や輪廻転生という仏教の教えにより、古代から人と動物の命に明確な区別をつけず同等にあつかわれることが多かった。^{1,2)} そのため、動物の死を弔うために古代から動物の墓がつくられており、犬の墓は「犬塚」とよばれていた。^{1~3)} 犬は世界で最初に家畜化された動物であり、^{1~3)} 縄文時代かそれ以前に人類と一緒に日本列島に渡来した日本最初の家畜と考えられ、⁴⁾ 人と動物との関係を知る手掛かりとして重要である。犬塚という地名は関東から西の九州までの各地に約15カ所も分布しており、⁵⁾ これらの地名に由来する犬塚という姓も珍しいものではない。^{1,2,6)}

古代の平安時代には818年に日本最初の獣医書である鷹狩用の鷹に関する「新修鷹経」が嵯峨天皇の勅命で成立したが、中世の鎌倉時代以降は軍馬が重視されたため、「馬医草紙」、「安西流馬医伝書」、「馬医醜酬」、「馬医巻物」、「仮名安驥集」など多くの馬医書が著されて全国各地の馬医に広く使用されてきた。³⁾

一方、犬については江戸時代の五代將軍徳川綱吉が約60回も発令した動物保護に関する御触「生類憐みの令」で重視されていたことが広く知られている。³⁾ 犬に関するその他の史料としては、江戸初期の「犬之書」、^{7,8)} 幕末期の「犬狗養畜伝」と「狎育様及療治」の3種があり、³⁾ また江戸中期の狂犬病流行期の医書である「狂犬咬傷治方」と「瘰狗傷考」の2種があるが、³⁾ 「生類憐みの令」以外は動物愛護的な記述はほとんどない。

そこで、筆者は犬塚の中でも、特定の犬の死を悼んで弔った義犬の墓(義犬塚)を研究することにより、我が国における動物愛護⁹⁾の歴史を知ることが出来ると考えて全国的な調査を行ってきた。また、日本人の動物観を知るため調査対象にした

KOZASA Manabu : History of Dog Graves and Animal Welfare in Japan

1. 日本獣医学史学会理事長 連絡先: 小佐々 学 〒337-0017 さいたま市見沼区風渡野328-1

TEL : 048-684-3170

(2016年9月31日受付・2016年10月15日受理)

犬塚は、古代にはじまり、中世から鎖国下の江戸時代を経て、欧米の教育法や動物愛護思想が一般には及んでいなかった幕末維新期である西南戦争終結の明治10(1877)年までとした^{1,2)}

筆者は全国各地に分布する百数十カ所の犬塚を調査して、動物愛護やヒューマン・アニマル・ボンド(HAB:人と動物の絆)の視点から重視すべき古い犬塚を『日本獣医史学雑誌』¹⁰⁾、『日本獣医師会雑誌』¹⁾や『義犬華丸ものがたり』²⁾などですでに報告している。

今回は、それらの犬塚にその後の調査結果を追加して、義犬の墓の歴史を総合的に解説し、その後に犬の家畜化と人と動物の絆、日本と西欧との動物観の違い、「生類憐みの令」の再評価や、昭和初期に現れた新語である「忠犬」を説明して、長年のあいだ続けてきた義犬の歴史と動物愛護史に関する研究成果の集大成を試みたい。

1 義犬の墓の歴史

日本各地に存在する義犬の墓(義犬塚)の中で動物愛護史から重視すべきものを選んで、古代史料の犬塚、伝説・伝承の犬塚、史実の犬塚、遺跡出土の犬塚の四種に分類して以下に解説する〔4頁の分布地図を参照〕。

(1) 古代史料の犬塚

特定の犬の墓をつくったことを明確に記載した古代史料は、8世紀初期に成立した『播磨国風土記』¹¹⁾と『日本書紀』¹²⁾の二つがある。

1) 犬次神社〔兵庫県西脇市堀町、4～5世紀頃の話、分布地図のa〕

『播磨国風土記』には、4～5世紀頃の話として「品田天皇(第15代応神天皇)の狩犬 麻奈志漏」を葬ったことが記載されている。その場所に現在の犬次神社が建てられたとされており、犬次神社の名は犬塚神社の転訛とされている¹³⁾(文献13の写真参照)。

2) 捕鳥部萬の犬塚〔大阪府岸和田市、6世紀後半の話、分布地図のb〕

日本最古の勅選の正史とされる日本書紀には、6世紀後半の話として「捕鳥部萬の白犬」の墓をつくったことが記載されている。国学の隆盛期の江戸時代後半に、比定地とされた天神山古墳群の2基の古墳の墳丘上に「捕鳥部萬墓」と「萬家犬塚」と刻んだ墓碑を建てたとされている¹⁴⁾(文献14の写真参照)。

古代史料に載る犬たちは、その行為から明らかに義犬と判断される。現存する神社や墓碑が古代史料に記載された場所と一致するかどうかは判断できない

が、古代に特定の犬の墓をつくったという史料の存在と、犬塚があったとされる場所を後世に祀ってきたという事実は、日本人の動物観や人と犬との絆を知る手掛かりとして貴重な史料や史跡として評価される。

(2) 伝説・伝承の犬塚

伝説・伝承の犬塚は、墓碑に飼主と飼犬の名前や建立時期などの刻銘がなかったり、また古い建立年号が刻まれた墓石であっても墓碑の様式が新しいため建立年代と一致せず後世の付会の可能性があったり、根拠となる史料がないために、史実と認定できない犬塚である。^{1,2)}

全国各地には「犬塚」とよばれる由緒不明な墓が多数存在するが、伝説・伝承のため地元に残る史料や調査資料によっては、その由緒や時代的背景の記述が大きく食違う場合も多い。また、日本にも明治時代まで「山犬」と呼ばれた狼がおり、畜産ではなく農耕主体の農業であったため、狼は猪、鹿、兎などの食害を防いでくれる田畑の守り神として、死後に土盛りの墓をつくって埋葬されることもあった。したがって、犬塚と呼ばれるものには犬だけではなく狼の墓も含まれる可能性が高いのである。^{1,2)}

これらのことを考慮して「犬塚」の中から、特定の飼犬の死を悼んで弔ったとされる代表的な墓13カ所を伝説・伝承の犬塚として以下に紹介する。

1) 聖徳太子の雪丸塚

聖徳太子の愛犬「雪丸」は言葉を話せたため、本堂下にある達磨廟を守るために遺骸を本堂東北の鬼門に埋葬するように遺言して死んだので、太子が雪丸塚に雪丸の石像をつくらせて置いたという〔奈良県王寺町・達磨寺、7世紀初期の話、分布地図のA〕。現在の雪丸石像は、18世紀末頃につくられたと推定されているが、境内整備時に本堂南西の裏鬼門に移されて安置されている¹⁾（文献1の図2参照）。

2) 人身御供伝説の犬塚

古狸、老狒々、大貉などの各種の妖怪から人身御供として生贄になった幼児や美女を救ったとされる犬の墓である。

「犬飼の大歳神社」〔兵庫県篠山市犬飼、7世紀中頃の話、分布地図のB〕、「高安の犬宮」〔山形県高島町・林照院犬宮、8世紀初期の話、分布地図のC〕、「霊犬早太郎の墓」〔長野県駒ヶ根市・光前寺、14世紀初期の話、分布地図のD〕などがある¹⁵⁾（文献15の写真1・2・3参照）。なお、光前寺の早太郎の話は静岡県磐田市

古代から幕末維新时期までの主な犬の墓(犬塚)の分布地図

〈1〉 古代史料の犬塚

- a. 犬次神社
- b. 捕鳥部萬の犬塚

〈2〉 伝説・伝承の犬塚

- A. 聖徳太子の雪丸塚
- B. 犬飼の大歳神社
- C. 高安の犬宮
- D. 光前寺の霊犬塚
- E. 犬鳴山七宝龍寺の義犬塚
- F. 六ツ美の犬頭神社・犬尾神社
- G. 善通寺の空海義犬塚
- H. 犬墓の空海義犬塚
- I. 福本の義犬塚
- J. 長谷の義犬塚
- K. 蓮如の義犬塚
- L. 羽犬塚
- M. 葛原の老犬神社



〈3〉 史実の犬塚

- ① 小佐々前親の義犬「華丸」の墓
- ② 牧野忠辰の義犬「かふ」の墓
- ③ 加藤小左衛門の義犬「矢間」の墓
- ④ 市原綱稠の義犬「白」の墓
- ⑤ 暁鐘成の義犬「皓」の墓
- ⑥ 横田三平の義犬「赤」の墓
- ⑦ オールコックの愛犬「トビー」の墓
- ⑧ は組の新吉の唐犬「八」の墓
- ⑨ 島津随真院の義犬「福」の墓
- ⑩ 小篠源三の義犬「虎」の墓

の見付天神ではしっぺい悉平太郎(疾風太郎)と呼ばれており、類似の話は各地にある。

3) 大蛇伝説の犬塚

主人が鹿や猪などの獲物を弓や鉄砲で狙っているときに、飼犬が突然吠えたため獲物が逃げたのを怒った飼主が犬の首を刎ねたところ、首が宙を飛んで主人を呑み込もうとしていた大蛇を咬み殺して救ったという犬の墓である。その後、飼主は悔い改めて神仏に帰依したという話で、類似の話は各地の寺社に伝わっている。

代表例として、「犬鳴山しっほうりゅうじ七宝龍寺の義犬塚」〔大阪府泉佐野市・七宝龍寺、9世紀末頃の話、分布地図のE〕、「六ツ実むつみの犬頭神社と犬尾神社」〔愛知県岡崎市六ツ実、14世紀中頃の話、分布地図のF〕などがある¹⁵⁾(文献15の写真4・5・6参照)。

なお、肥前国平戸藩九代藩主の松浦静山が書いた『甲子夜話 卷之三十一』にも、領内に「犬堂」が建てられた由来として同じ内容の話が記されている。¹⁶⁾

4) 弘法大師伝説の犬塚

真言宗の開祖 空海が唐から連れ帰ったとされる義犬の墓である。

「善通寺の空海義犬塚」〔香川県善通寺市・仙遊院、9世紀初期の話、分布地図のG〕と「犬墓いぬのはかの空海義犬塚」〔徳島県阿波市市場町犬墓、同時代の話、分布地図のH〕がある¹⁵⁾(文献15の写真7・8参照)。

5) 播州犬寺の義犬塚

蘇我入鹿に従軍した播磨ひらふの長者しゅうぶ 枚夫(秀夫)を殺そうとした下僕を咬み殺して主人を救った白犬と黒犬の2頭の死を弔うために、枚夫が金楽山法楽寺(播州犬寺)と犬塚を建てたとされている。¹⁵⁾

「福本の義犬塚」〔兵庫県神河町福本、7世紀中頃の話、分布地図のI〕は、白犬石塔と黒犬石塔の2基の無銘の墓がある(文献15の写真9・10参照)。また、これらとは別に同じ神河町に「長谷の義犬塚」〔同町長谷、同時代の話、分布地図のJ〕があり、枚夫の義犬のうち1頭がこの地で死んだので葬ったとされる無銘の犬塚があるが(文献15の写真11参照)、2頭の犬に3基の墓があるのも伝説的といえよう。

6) 蓮如の義犬塚

「蓮如の義犬塚」〔滋賀県大津市逢坂、15世紀中頃の話、分布地図のK〕は、浄土真宗の中興の祖とされる本願寺八世の蓮如が毒入りの食事で殺されそうになったとき、身代わりになって命を救った義犬の墓とされている。^{1,2)} 蓮如が植えたと思われる榎の大木の前に、前面に「犬塚」と刻まれた墓碑があるが後世の建立とされている。

7) 羽犬塚

「羽犬塚」〔福岡県筑後市羽犬塚・宗岳寺，16世紀後期の話，分布地図のL〕は、豊臣秀吉の九州出兵のとき両翼がはえた犬の死を弔うために建てた墓とされるが、秀吉軍を苦しめた猛犬説と秀吉が飼っていた俊敏な愛犬説とがある。なお、JR鹿児島本線には地名に由来する羽犬塚という駅がある¹⁵⁾(文献15の写真12参照)。

8) 葛原の老犬神社

「葛原の老犬神社」〔秋田県大館市葛原・老犬神社，17世紀初期の話，分布地図のM〕は、主人のマタギ(獵師)の定六(左多六)の死を悲しみ、食餌をとらずに餓死したという白犬を祀る神社である¹⁵⁾(文献15の写真13参照)。

上述の通り、伝説・伝承の犬塚には史実に近いものから明らかに伝説と思われるものまでであるが、神社には墓碑がないため確認は難しく、また地元では有名な犬塚であっても無銘のため特定の犬の墓とする決め手に欠けたり、さらに伝説の時代と墓碑の制作年代とに大きな時代的ずれがあるために後世の付会とされる犬塚もある。

歴史的裏付けが乏しいとはいえ、特定の犬の死を悼んで弔った義犬たちの塚が全国各地に存在するのは事実であり、日本人と犬との絆を今に伝えるものとして意義があろう。

(3) 史実の犬塚

歴史上の事実である史実の犬塚は、墓碑に飼犬の墓であること、建立年号や飼主の名前などが刻銘され、また墓碑の形式と建立年代とが一致するなど史実としての条件を満たした犬塚である。

以下に、全国各地を調査して史実と認定した幕末維新期以前の犬塚10基を年代順に解説するが、日本人の動物観や人と犬との絆を知る動物愛護史の貴重な史跡になっている。これらの史実の犬たちは義犬であるが、義犬の歴史は日本の動物愛護史であり、また世界のヒューマン・アニマル・ボンド(HAB，人と動物の絆)の貴重な史跡として重要である。^{1~3)}

1) 小佐々前親の義犬「華丸」の墓〔長崎県大村市萬歳山本経寺・国指定史跡，1650年(慶安3)，犬種：雄の狆，分布地図の①〕^{1~3, 17~20)}

小佐々市右衛門は、肥前国大村藩の重臣であった小佐々勘左衛門政親の嫡男で漢籍講読に秀で抜群だったため、10歳のとき初代藩主大村喜前の偏諱を受けて市右衛門前親と名乗った。15歳の若さでわずか3歳だった三代藩主純信の守役

(傳役)に任命されて、幼少年期の純信に近侍して文武両道にわたって教育・補佐した。純信が最も信頼する近臣で、23歳で家老となって長年にわたり純信を補佐して藩政を支えた。

ところが、自分が大切に守り育てた純信が江戸表で33歳の若さで急逝したとの悲報に接した前親は、慶安3年6月18日に大村城下の本経寺の大村家墓所で追腹(切腹)して享年45歳で殉死した。前親の遺体は本経寺で火葬されたが、前親が常日頃から膝元に抱いて可愛がっていた華丸が、主人の死を悲しんで涙して泣き、突然その荼毘の火の中に飛び込んで焼死した。藩主純信に殉じた「義臣前親」と主人前親に殉じた「義犬華丸」の死を供養して末永く顕彰するため、純信の高さ6m(2丈)の巨大墓の前に、前親の高さ3m(1丈)の大型墓とその隣に華丸の90cm(3尺)の小型墓が並んで建てられた。

華丸の墓碑には、漢学者であった前親の高弟が撰文した132文字に及ぶ格調高い漢文の由緒書があり、その中には「前親と華丸はお互いに親しんでおり、前親は常に華丸を愛して膝元に抱いていた」ことなどが記述されており、両者の親密な交情が見事に活写されている。「愛」という言葉が使われていることから、華丸は主人に殉じた義犬であると共に愛犬や伴侶犬であったことが分かる。江戸時代初期の高さ3尺の華丸の墓は上級武士と同等であり、五代将軍徳川綱吉の「生類憐みの



写真1 筆者(中央)と小佐々前親の墓(左)と義犬華丸の墓(右)(大村市本経寺)

令」より35年も前に建てられており、また忠犬ハチ公の墓の285年も前のことである。さらに、欧米でも動物愛護や動物福祉の考え方が未だなかった時代であることから、主人の墓の隣に並んで建つ華丸の墓は動物愛護史やヒューマン・アニマル・ボンドの歴史からも世界的に貴重な史跡といえよう(写真1、文献1・2と17～20の写真参照)。

2) 牧野忠辰^{ただとき}の義犬「かふ」の墓〔新潟県長岡市悠久町・義狗^{ぎく}の塚、1684～1687年(貞享年間)、犬種：里犬(日本犬)、分布地図の②〕^{2,21～23)}

越後国長岡藩の百姓・善兵衛が飼っていた白犬「かふ」は狼を咬み殺したくらい強く大きかったので、譜代大名の長岡藩三代藩主牧野忠辰^{ただとき}の所望で献上されて忠辰に寵愛されていた。御三家筆頭の尾張公の鷹匠頭が大型の唐犬(洋犬・南蛮犬)を連れて江戸表の牧野邸の前を通ったところ、「かふ」は唐犬に飛びかかって傍の溝に突き落としてしまった。忠辰がこんなことをしたら江戸表には置けないぞと「かふ」を叱ったところ、翌日から姿を消して長岡まで帰っていた。長旅の疲れなどで息絶えたため、忠辰の指示で土盛の塚をつくって「かふ」は手厚く葬られた。今でも残るこの塚の上には明治時代の県令が撰文した碑文が彫られた石碑が置かれている(文献2の写真参照)。

この犬塚の由緒は明和8年(1771年)の『越之風車』²³⁾に載っており、貞享年間の出来事と記述されているが、犬同士の喧嘩を尾張家が絶対に内密にしてくれと強く言い張っていることから、貞享2年(1685年)頃に発令された「生類憐みの令」の発令後まもない時期につくられた犬塚と判断され、貴重な史跡ということが出来る。

3) 加藤小左衛門の義犬^{やま}「矢間」の墓〔長崎県雲仙市小浜町札の原、1787年(天明7年)、犬種不明、分布地図の③〕^{1,2,24)}

雲仙温泉の湯大夫(湯元)・加藤小左衛門の飼犬「矢間」は、加藤家から親戚まで手紙を届ける「お使い犬(飛脚犬)」で、加藤家の娘を救うなどして名犬と呼ばれていた。天明7年に雲仙温泉近くの札の原で手紙を奪おうとした盗賊と闘って死んだので、小左衛門は矢間の半身像を立体的に浮彫りにした墓を札の原に建てて供養した(文献1・2・24の写真参照)。なお、飛脚犬に類似した話になるが、『関八州古戦録』²⁵⁾には、永禄4(1561)年に北條氏の大軍に包囲された松山城(埼玉県比企郡吉見町)から救援依頼状を首に付けた^{いぬ}獺(犬)5匹が放たれて、飼主である岩槻城(同県さいたま市岩槻区)の太田資政(三楽斎)に無事書状を届けたことが記されており、戦国時代の合戦ですでに軍犬(伝令犬)が使用されていたことがわかる。

4) 市原綱稠^{つなしげ}の義犬「白」の墓〔福島県須賀川市池上町・十念寺, 1789～1800年(寛政年間), 犬種:日本犬, 分布地図の④〕

須賀川市十念寺の墓地には「犬塚」と刻まれた台座の上に背中にお札を背負った旧い犬の石像が置かれている。この台座には、昭和44年に市原家十四代の市原秀夫が台座をつくって、古くから墓地にあった「白」の石像を安置したことが記されている(写真2)。また、この碑文には寛政の昔に市原貞右衛門綱稠^{つなしげ}の飼犬「白」が主人の命で伊勢参りを代参し、道中で多くの人々に守られながらお札を持って帰宅したことが記載されている。

市原家は須賀川宿の旧家で代々庄屋を務めていたが、八代綱稠は寛政9(1797)年に白河藩士に取り立てられた。²⁶⁾ 綱稠は伊勢の皇大神宮(内宮)に毎年参宮していたが病気で行けなかったため、買物や親類に手紙を届けるお使い犬であった愛犬「白」に代参させた。「白」は

2ヵ月後にお札を持って無事帰って来たので家族一同は無事を大いに喜び、白は「参宮犬」として町中の大評判になったが、3年後に病気で死んだため綱稠は白の石像をつくって十念寺の墓地に葬った。²⁷⁾ 江戸時代には全国各地から伊勢神宮への参拝が盛んで年間数百万人にも及ぶこともあったという。²⁸⁾ 前述した平戸藩九代藩主松浦静山が書いた『甲子夜話 卷之七十八』には、寛政11(1799)年に日光東照宮を参拝して江戸への帰路に奥州白河から伊勢に行く「楮毛(赤毛)」の参宮犬^{あかけ}が静山の輿に付いてきてしばらく同行したことが記されている。²⁹⁾ このことから、江戸時代には白のような参宮犬が少なからずいたことが分かる。

5) 暁鐘成^{あかつきのかねなる}の義犬「皓」^{しろ}の墓〔大阪府東大阪市・梅龍山^{かんじょういん}勸成院, 1835(天保6)年, 犬種不明, 分布地図の⑤〕^{1,2,30)}

大坂の戯作者・暁鐘成が愛犬「皓」を連れて奈良に行く途中、暗峠^{くらがりとうげ}で盗賊に遭い皓が身代わりになって死んだのを弔うために建てたとされる犬塚である。高さ60cm(2尺)の墓碑には皓のために121文字の漢文の追悼文が刻銘されており、鐘成は皓の死を悲しんで、僧に頼んで追悼して埋葬したことが記述されている。また、この墓碑の前には皓と思われる犬の小型の石像がある(文献1・2の写真参照)。



写真2 参宮犬「白」の犬塚。
背中には伊勢神宮のお札を背負う
(須賀川市十念寺)

6) 横田三平の義犬「赤」の墓〔高知県安芸市井ノ口, 1853(嘉永6)年, 犬種: 四国犬, 分布地図の⑥)^{1,2,31)}

土佐藩家老の五島家の知行地であった井ノ口村の百姓・横田三平が飼っていた赤は、三平の息子の寅次と乙次兄弟といつも一緒に行動していた。兄弟が近くの山に柴取りに行き、乙次が谷に落ちそうになったとき、赤は乙次の襟をくわえて放さなかったため転落をまぬがれて助かった。この地の領主五島家は赤の義犬美談を後世に伝えるために、家臣の漢学者に撰文させた228文字に及ぶ漢文の由緒書が刻銘された墓碑をつくった。赤の墓碑は全高120cm(4尺)の江戸時代最大級の犬塚で、正面には「義狗墓」の文字が、他の三面には漢文の由緒書が刻まれている(文献1・2・31の写真参照)。なお、赤の墓の近くには三菱財閥の祖である岩崎弥太郎の生家がある。

7) オールコックの愛犬「トビー」の墓〔静岡県熱海市上宿町・大湯間欠泉公園, 1860(万延元)年, 犬種: スコッチテリア, 分布地図の⑦)^{2,21)}

ラザフォード・オールコックは、安政7(1859)年来日して初代英国公使となって活躍した外交官である。翌年秋に外国人として初めて富士山に登頂した後、静養のため熱海の本陣に滞在していた。³²⁾ところが、英国から連れてきた愛犬「トビー」が、当時は世界三大間欠泉と呼ばれて大量の湯を噴出していた大湯間欠泉の熱湯を浴びて大火傷で死んでしまった。³³⁾トビーの死を知った本陣の主人や村人が駆けつけて自分の親族が死んだかのように悲しんで、寺の僧侶を呼んで人を弔うのと同様に回向して本陣の庭に穴を掘って丁重に埋葬した。これを見ていたオールコックが深く感動して墓碑をつくる約束をしたことが、彼の著書『大君の都』³⁴⁾に記録されている。

元は本陣の庭にあったはずであるが、オールコックがつくらせた「Poor Toby! 23 Sept. 1860」と彫られた「トビーの墓碑」と、漢文で彫られた「熱海訪問記念碑」の2基の石碑が、今では人工的にわずかな水蒸気を噴出している大湯間欠泉の公園内に並んで建っている。後述するように、西欧のキリスト教国では1822年の英国での動物虐待防止法の成立以降も動物である犬の墓をつくる習慣はなかった。オールコックがトビーの墓碑を建てたのは、上流階級では飼犬を弔うために墓を建てていた当時の日本人の動物観の影響を強く受けたためと考えられ、西欧の動物愛護史との関係で貴重な史跡といえよう(文献2の写真参照)。なお、主人に同行して不慮の死をとげたトビーは愛犬であるが、義犬でもあったのである。

8) は組の新吉の唐犬「八」の墓〔東京都墨田区両国・諸宗山回向院, 1866(慶応2)年, 犬種: 唐犬, 分布地図の⑧)^{1,2)}

回向院の有名な鼠小僧次郎吉の墓の後方に並ぶ墓碑の中に、町火消の「は組」の新吉を施主とする幕末の慶応2年銘の唐犬(洋犬・南蛮犬)の「八」の墓がある。一見すると、犬種、犬名、年月日と飼主(施主)以外は不明だが、拓本を取ったところボルゾイやマスティフに似た大型洋犬の姿が彫られていることが判明した(文献1・2の写真参照)。由緒書がないため詳細は不明であるが、新吉は「は組」の組頭か幹部と思われ、墓碑に犬の姿まで彫ったのは愛犬(義犬)だったのであろう。珍しい大型洋犬を引き連れて、誇らしげに胸をはって江戸市中を歩く新吉の姿が目には浮かぶのは筆者だけではなかろう。

9) 鳥津随真院の義犬「福」の墓〔宮崎県宮崎市佐土原町・大池山青蓮寺高月院, 1869(明治2)年, 犬種: 狽, 分布地図の⑨〕^{1,2,35)}

日向国佐土原藩主鳥津忠徹の夫人随子は、忠徹の死後に剃髪して随真院になり、佐土原にお国入りのときに愛犬「福」も駕籠に乗せられて江戸下がりのお供をした。福は明治2年に佐土原で死んだため、高月院の藩主家墓所の隅に葬られた。全高80cmの福の墓碑の正面には「高林女転生慈福霊」という輪廻転生思想にもとづく福の戒名と年月日が、他の三面には228文字に及ぶ漢文の由緒書が刻まれている。碑文には、随真院はいつも福を側において可愛がっており、福も主人を慕い守っていたことが記述されている。江戸時代初期と維新时期とでは二百年以上の時代差があるが、華丸の墓と同様に主人と飼犬の交情を刻銘した福の墓碑は貴重である(文献1・2・35の写真参照)。

10) 小篠源三の義犬「虎」の墓〔熊本県熊本市花園・本妙寺雲晴院, 1876(明治9)年, 犬種: 不明, 分布地図の⑩〕^{1,2,36)}

明治9年に熊本土族の神風連(敬神党)がおこした神風連の乱は、我が国古来の敬神の精神にもとづく国粹保存を主張し、急激な文明開化を推進する明治政府の廃刀令や散髪令などの欧化主義に反対して決起した事件である。熊本鎮台を一時占拠したが翌日鎮圧されて志士の多くが戦死または自刃した。小篠4兄弟も出陣して敗戦後に自刃して果てたが、四男で末弟の源三は18歳であった。源三の愛犬「虎」は、源三の死を悲しんで墓前に座り続けて動かず、食餌を与えても何も食べずに餓死した。雲晴院の墓所には小篠4兄弟の墓碑があり、高さ90cmの源三の合葬墓の隣には「殉死犬虎墓」と刻まれた高さ約75cmの自然石の墓碑が建っている。また、熊本市黒髪桜山神社には神風連百二十三士を祀る顕彰墓地があるが、墓地入口右側の灯籠の側には「義犬之墓」と刻まれた虎の小型の顕彰墓碑がある。このことから、明治時代まで「義犬」という言葉が使われていたことがわか

る(文献1・2・36の写真参照)。

翌年の明治10年に勃発した西郷隆盛らによる西南戦争が平定されて、いわゆる動乱の維新时期(広義の維新时期)が終焉を迎えた。虎の墓は、一部の階層を除けば日本人の風習が未だ欧風化しておらず、欧米の教育法や動物愛護思想の影響が一般には及んでいない時代である維新时期最後の犬塚として意義があろう。

以上に述べてきた通り、史実として厳選した犬塚10カ所を紹介したが、これらの中の4基には漢文で詳しい長文の由緒書きが刻まれており、また4基には彫像や線刻により犬の姿が刻まれている。これらの史実の犬塚を調査して考究すると日本人と犬との深い絆を示す様々な事実が見えてくるが、残念ながら詳しいことは紙面の都合で割愛する。

「史実の犬塚」年表

建立年代	飼主	犬名	墓所所在地	備考
1650年	小佐々前親	華丸	長崎県大村市	長文の碑文入り墓碑・飼主の墓と並んで建立
1684～1687年	牧野忠辰	かふ	新潟県長岡市	土盛の塚・顕彰石碑
1685～1709年	(五代将軍徳川綱吉の「生類憐みの令」)			
1787年	加藤小左衛門	矢間	長崎県雲仙市	犬の半身像入り墓碑
1789～1800年	市原綱稠	白	福島県須賀川市	犬の全身像・顕彰台座
1835年	暁 鐘成	皓	大坂府東大阪市	長文の碑文入り墓碑・墓前に犬の全身像
1853年	横田三平	赤	高知県安芸市	長文の碑文入り墓碑
1860年	オールコック	トビー	静岡県熱海市	英文の銘入り墓碑
1866年	は組の新吉	八	東京都墨田区	犬の全身像の線刻入り墓碑
1868年	(明治維新)			
1869年	島津随真院	福	宮崎県宮崎市	長文の碑文入り墓碑
1872年	グレイ	ボビー	英国エジンバラ	西欧初の史実の犬の墓・顕彰墓碑は1981年製
1876年	小篠源三	虎	熊本県熊本市	飼主の墓と並んで建立・後に神社にも顕彰墓碑
1877年	(西南戦争が勃発・終結)			

(4) 遺跡出土の犬塚

東京都港区高輪の伊皿子貝塚遺跡の旧・泉谷山大圓寺境内跡からは、高さ45cm(1尺5寸)以下と推定される6基の墓が見つかっている。このうち4基は犬の墓、1基は猫の墓、1基は人の墓である。また、江戸時代の大圓寺は大名や旗本の菩提寺であったことから4基は奥向で飼われていた犬の墓とされている。³⁷⁾

文政十(1827)年とされる墓碑1基は上部が欠けているが「□橋御狎 □鼻養狗之靈」とあり、文政十三(1830)年銘の2基は「高輪 御狎白事 素毛脱狗之靈」と「御亀事 亀毛俊狗之靈」とあり、天保六(1835)年銘の1基には「三田御屋鋪大奥御狎 名染 離染脱毛狗之靈」とある。狎が3基と狗(犬)が1基で、「養狗」は飼犬を、「素毛」は白毛を、「俊狗」は俊敏な犬を、また「脱狗」や「脱毛」は死後に犬や獣(毛物)から人に転生したことを表すと考えられる。また、狎は「御狎」として尊敬・親愛の気持ちが込められており、戒名の末尾にある「靈」からは日本では動物にも靈魂の存在を認めていたことがわかる。前述した日本最古の史実の犬塚に葬られている「華丸」の位牌の写には戒名はないが、「小佐々市右衛門前親之家犬 御狎 養犬華丸靈」と記載されており「御狎」と「靈」の表記が一致している。

唐犬「八」の墓がある両国の回向院の過去帳には、天保7(1836)年から嘉永5(1852)年までに犬猫の戒名が11例(狎6・狗1・猫4)記録されていることが報告されており、³⁷⁾ 全ての戒名には「転生」の表記があるが「御狎」や「靈」はない。また、前述したように佐土原の義犬「福」の戒名には「転生」と「靈」の表記がある。このような犬の墓碑銘の表記法は日本人の動物観を考える上で重要であり、極めて興味深い。

なお、同じ犬なのに狎と狗を使い分けているのは、日本では江戸時代まで屋内で飼う狎は特別な動物で、狎とその他の犬(狗)は別種の動物と考えられており、狎は大名・旗本や豪商などの上流階級や一部の富裕層が飼育する高価な愛玩動物であった。また、江戸時代の高さ1尺5寸の墓碑は中級武士と同等と考えられるが、下級武士や一般庶民は土盛の塚に木柱を建てて葬られていた。日本の動物の墓には今回紹介したような石碑や神社となって残る犬塚の他にも、石造の馬頭観音や各種の動物慰霊碑の存在が知られている。これらのように現存する石碑の塚は特例であり、動物の墓のほとんどが土盛の塚だったため墓跡が残らないため確認できないが、実際には多くの動物を埋葬した墓が全国各地に存在していたと推察される。犬・猫・馬・牛・鶏などの家畜・家禽の他にも、狼・狐・熊・猪や鯨などの野生動物の墓もつくられており、中には神社の祭神となって祀られた動物もいる。

2 犬の家畜化と人と動物の絆

最近のDNA解析などから犬(イエヌ)の祖先は狼(タイリクオオカミ)であることや、犬は人類により最初に家畜化された動物であることはほぼ間違いないとされている。犬の家畜化で特に注目されてきたのは、現在のイスラエルにある一万二千年前のアインマラハ遺跡で、人の遺体の手が子犬の遺体の上に置かれる形で一緒に埋葬されており、人と犬との親密な関係を示すものとされている。また、一万四千年前のドイツの遺跡出土例などから、従来の説では犬の家畜化の時期はおよそ一万五千年前というのがほぼ定説化しており、筆者も獣医史学の教科書に同様なことを記載している。³⁾ところが、最近になって中国南部での三万二千年前説やヨーロッパでの三万～二万年前説などが次々と発表されて論争になっている。その理由は、人類の文明・文化の起源には人の社会化と動物の家畜化が深く関わっていると考えられており、最古の家畜である犬の家畜化は人類の歴史にとって重要な意味を持っているのである。

また、日本においても犬は最古の家畜であり、神奈川県横須賀市の夏島貝塚出土例の犬の骨は縄文時代早期(約9,500年前)で日本最古とされている。また、愛媛県久万高原町の上黒岩岩陰遺跡出土の埋葬例の犬の骨を放射性炭素で年代測定した結果、縄文時代早期末から前期初頭(7,300～7,200年前)であることがわかり、年代が確定した日本最古の埋葬例と報告されている。^{1-3,38)}これにより、犬を大切にあって埋葬していた時期が明確になり、日本における人と犬との関わりを解明する重要な手掛かりが得られた。

縄文時代にいた縄文犬は、縄文時代かそれ以前の後期旧石器時代に人類と一緒に日本列島に移住してきたと考えられるが、丁寧に埋葬された犬の骨の出土例があることから狩猟犬や番犬として大切に扱われていたとされている。一方、弥生時代の弥生犬は、弥生人と一緒に朝鮮半島経由で渡来したとされるが、水稲耕作と共に大陸の食習慣である犬食も渡来しており、家畜である弥生犬には食用犬としての重要な役割があった。そのため、弥生人が食用にした解体痕が残る犬骨が出土している。¹⁻³⁾

3 西欧と日本の動物観

日本における最初の動物愛護活動は明治時代後期⁹⁾とされているが、本格的な動物愛護やヒューマン・アニマル・ボンドなどの活動は第二次世界大戦後の昭和中期以降に欧米から導入されたものである。現在では日本に較べて欧米の方が動物愛護の先進地とされているが、義犬の歴史からもわかるように、かつては日本

の方が動物愛護の先進地であった。その理由は主に宗教による動物観の違いにあるので、その概要を以下に述べてみたい。

(1) 西欧の動物観

西欧の動物観は、唯一の神だけを信仰する一神教であるキリスト教にもとづいており、『旧約聖書』の「創世記」には神が人を創造したときに祝福して言われた言葉として「生き物を全て支配せよ」と書かれている。³⁹⁾ 人にとって動物は支配すべき対象であり、動物の命に対して厳しく無情で、かつての西欧では動物虐待が日常的に行われていた。また、動物には霊魂がないとされているので、動物の墓をつくって葬ることもなかった。

戦国末期に来日して有名な『日本史』を著したポルトガル人宣教師ルイス・フロイスの『日本覚書(日欧文化比較)』^{40,41)}には、日本の馬子が馬を憐れんで荷物の一部を肩に担いでいたのを記述しているが、フロイスにとって動物に対して人と同様に憐憫の情を示す日本人の行動は意外な出来事だったのである。

(2) 日本の動物観

日本人の動物観で特に重視されるのは神道と仏教の影響である。神道では「八百万の神」的な感性により、人と動物の命は同等にあつかわれることが多かった。江戸中期の国学者である本居宣長の『古事記伝』の日本の神の定義のように、本来の神道はアニミズム的な多神教であり、鳥獣草木や海山など畏敬の念を起こさせる事物はすべて神とされている。^{42,43)} また、仏教の「衆生(有情)」や「輪廻転生」の教えにより、人と動物の命に明確な区別をつけなかった。衆生(有情)とは心の働きや感情を持つものことで、全ての人や動物を含んでいる。輪廻転生とは衆生が三界六道を迷い生死を重ねることで、その中には人が動物に、動物が人に生まれ変わることもあるという考え方がある。また、釈迦の入滅を描いた涅槃図には、弟子をはじめとする多くの人間と一緒に、様々な動物たちが嘆き悲しむ姿が描かれている。

このような神道や仏教の動物観からすれば、日本では人と動物の命をほぼ同等視しており、動物に優しく同情的で、古代史料の犬塚の項で紹介した通り、古代から動物の墓をつくって吊っていた。また、現存する義犬の墓の中には、神社の祭神となって祀られたり、寺院では人と同じ墓所に建てられて供養されている犬塚も多いのである。なお、4頁掲載の分布地図の余白部分にも、実際には相当数の犬塚があったと思われるが、石碑がない土盛りの塚だったため今では墓跡が消失したと考えられる。また、北海道には犬塚の記載がないが、先住民族アイヌ

により犬は死後に丁重に埋葬されていた可能性があるろう。

(3) 再評価される「生類憐みの令」

日本の動物愛護史上で特筆すべきことは、江戸時代の五代将軍徳川綱吉による「生類憐みの令」である。貞享2(1685)年頃から宝永5(1708)年までに約60回も発令された動物の捕獲禁止・殺傷禁止・保護収容に関する「動物の取り扱いに関する御触」の総称である。^{44~48)} 犬の保護を重視したのは僧隆光の提言によるとの説は最近では否定されている。

この法令で重要なのは動物だけではなく人も生類の対象になっており、捨子禁止、行路病者の救済や牢獄環境の改善など人の保護まで含んでいたことである。また、戦国時代からの旧弊である「武断政治」から「文治政治」に変えるために、命の大切さを理解させる手段だったという評価もある。違反者への死罪、遠島、追放などの厳しい刑罰や十萬頭以上の犬を収容した広大な犬小屋(御囲)の維持費を町民などから徴収するなど運用面での行き過ぎで不評を招いたが、「犬殺しは死罪=人殺しは死罪」など、綱吉は人と動物の命を同等視して信念をもって対処していたことが注目される。なお、この法令に伴う「犬毛付帳」は世界最初の畜犬登録制度である。

人の立場だけを重視した従来の歴史教育により、「犬公方が制定した天下の悪法」とされてきた「生類憐みの令」は、動物のみならず人の保護まで含んだ世界最初の動物保護法として極めて重要である。特に「伴侶動物は家族の一員」とされる現代では「生類憐みの令」を積極的に再評価すべき時期がきていると考えられる。^{1,2)}

(4) その後の動物愛護史

西欧ではその後も動物虐待が日常的に行われていたが、18世紀後半になって初めて動物が痛みを感じると感情に気付くなどして動物にも道徳的配慮をすべきだという活動がはじまり、19世紀初期の1822年に英国で「動物虐待防止法(マーチン法)」が制定された。その後も、旧約聖書の動物を「支配せよ」を「管理せよ」に読み替えるなど、動物愛護や動物福祉が論理的・科学的に発展してきた。その理由はキリスト教の教義に反するため理論武装が必要だったこと、さらに、ダーウィンが1859年に進化論『種の起源』を発表しており、特に1871年に発表した『人間の由来』により動物と人との連続性が理解されて、動物の苦痛を和らげる必要性が認識されたためである。1872(明治5)年に、英国スコットランド・エジンバラのグレイフライヤーズで14年間も主人の墓を守り続けたとされるスカイ・テリアの

「ボビー」の墓がつくられたのも⁵¹⁾このような経緯を経たからであろう。これは華丸の墓の222年後で、忠犬ハチ公の墓の63年前のことである。

一方、日本では犬塚をつくったことが古代史料に記録されており、その後も伝説・伝承の犬塚が各地に存在するが、17世紀中期に建立された史実の犬塚が飼主の墓と並んで現存している。また、17世紀末には人の保護をも含む世界最初の動物保護法「生類憐みの令」という法令があり、この当時の日本は動物愛護の世界的な先進国であった。ところが、その後は動物愛護や動物福祉に関する積極的な活動は行われておらず、19世紀の後半以降は西欧に較べて動物愛護の後進国になってしまった。その原因は、動物を同情的にあつかってきたため動物虐待の歴史がなく、西欧に較べて動物に対する態度が曖昧で、動物愛護の必要性に気付かなかったためと思われる。

日本で「動物の保護及び管理に関する法律」(動物管理法)ができたのは昭和48(1973)年のことで、これを大幅に改正して「動物の愛護及び管理に関する法律」(動物愛護法)ができたのは平成11(1999)年であるが、この法律は平成17(2005)年と平成24(2012)年に追加・改正された。このように、欧米と類似した動物愛護の法律ができたのは20世紀末から21世紀初頭のことであり、「生類憐みの令」から三百年後になってやっと動物愛護の後進国から脱することができたのである。

4 「義犬」と「忠犬」

(1) 義と忠の語意の違い

筆者が犬塚の歴史を調査して発表するまでは「義犬」という言葉はほとんど知られておらず、「忠犬」が広く使われていた。そのため、筆者の報告でもやむを得ず、義犬の説明に忠犬を使用したこともあった。序論で述べたように義犬は古代から使われた由緒正しい言葉であるが、忠犬は昭和初期に有名になったハチ公に初めて使われた新語である。『広辞苑・第五版』には「忠犬」はあるが「義犬」は載っておらず、すでに死語になっていることがわかる。

そこで、「義」と「忠」の語意の主な違いを見ると、義は「①道理。条理。物事の理にかなったこと。人間の行うべきすじみち。②利害をすてて条理にしたがい、人道・公共のためにつくすこと。」とあり、一方、忠は「①いつわりのない心。まごころ。まこと。まめやか。②君主に対して臣下たる本分をつくすこと。」とある。「忠義」という言葉が使われるため同義語のように思われるが、義と忠は②項の部分が大きく違うことがわかる。

(2) 忠犬という呼称

義犬は飼主やその仲間のために命がけで行動したり、そのために殉じた犬たちのことで、強い自己犠牲を伴っており究極の愛犬であり伴侶犬であったことは、犬塚の歴史からも裏付けられる。

一方、「忠犬」は渋谷駅前でもただ待っていただけのハチ公がマスメディアによって有名になって付けられた呼称である。この忠犬という言葉の元になった東京帝国大学農学部教授 上野英三郎教授の愛犬だったハチ公は、昭和初期に渋谷前で主人の帰りを長年のあいだ待ち続けたということから、当時のマスメディアに大々的に喧伝されて生前に渋谷駅前に銅像が建てられており、ハチ公が死んだ昭和10(1935)年には「恩ヲ忘レルナ」と題して尋常小学校の修身の国定教科書にまで載って全国的に有名になり、国民的英雄である「忠犬」と呼ばれる犬になった。^{49~52)}

なお、ハチ公の死因は剖検時の肉眼所見からフィラリア症とされてきたが、最近の病理組織検査により肺と心臓に悪性腫瘍が確認されて肺原発の癌肉腫と診断されており、フィラリア症と共に死因であった可能性が報告されている。⁵³⁾

(3) 忠犬ハチ公誕生秘話

ハチ公が新聞記事になった経緯を調査した元毎日新聞記者の仁科邦男が寄稿した『動物文学』70巻2号掲載の「忠犬ハチ公物語はこうして誕生した」には、新聞記事がきっかけになって有名な忠犬になった経緯が書かれている。⁵⁴⁾ 先ず、渋谷駅前にいる大きな汚れた犬に興味を持って調査した鉄道記者倶楽部の元東京日日新聞(現・毎日新聞)の林謙一記者(後のNHKの連続テレビ小説「おはなはん」の作者)と連合通信の細井吉蔵記者の2人により、その後のハチ公美談の元ネタ原稿が作り上げられたこと、次いで倶楽部でこの回覧原稿を見た東京朝日新聞(現・朝日新聞)の渡辺紳一郎記者(後のNHKラジオやテレビ番組の「話の泉」や「私の秘密」のレギュラー出演者)が書いた「いとしや老犬ものがたり、今は世に亡き主人の帰りをまち兼ねる七年間」と題した写真入り記事が昭和7(1932)年10月4日付の新聞に載って、多くの読者の同情をかい、大きな反響を呼んで特ダネ記事になったことが書かれている。この元ネタ作成時に林記者が、強引に「主人を待っている」ことにして、犬を家に連れ返さないように上野教授の未亡人に勧めたとされている。ハチ公美談の信奉者には信じ難いことになるが、「渋谷駅前で長年にわたって主人を待っていた忠犬」として、マスメディアに大々的に取り上げられて国民的英雄となって顕彰されてきたハチ公美談の根幹部分が、実際には元ネタ記事を書く時の作戦(恣意的な断定記事)だったというのである。ハチ公が

渋谷駅前にいた理由については以前から異論があったが、⁵⁵⁾ 擬人化して「待っている」ことにしたのが真相である。

(4) 忠犬という呼称と時代的背景

修身の教科書に載ったときに、動物文学会の主宰者でイヌ科生態研究所長の平岩米吉が指摘したことであるが、主人の帰りを待つのは全ての犬が持つ特性であるから、ハチ公だけを悲劇の主人公として全国的なお祭り騒ぎをして英雄や偶像的存在に祭り上げて、「恩ヲ忘レルナ」という題で修身の教科書に載せるのは間違いであると指摘している。⁵⁶⁾

このようなハチ公に対する論評が評価されなかった理由や、「義犬」ではなく「忠犬」という呼称が使われたのは、満州事変後の当時の時代的背景があったと考えられる。この修身の教科書は文部省による国定教科書であり、軍国主義化が推進されていた時代の国策に沿ったものと思われる。さらに、当時の「忠犬ハチ公銅像建立趣意書」のチラシを実見したところ、文末の最初に「後援」として「文部省社会教育局 皇国精神会」の名が太字で載っており、その後に「発起人」として日本犬保存会や渋谷駅長などの関係者が並んでいる。このことから忠犬ハチ公の名が急速に全国に広まったのは、マスメディアの活動や地元の努力もあろうが、当時の文部省の思想教育担当部門が「忠犬ハチ公」顕彰活動を国策として強力に推進したためと推察される。また、「忠犬」と命名されたのは、駅前でただ待っていただけのハチ公の行動には強い自己犠牲を伴わないため義犬と呼べなかったこともあろうが、忠の語意である「君主に対して臣下たる本分をつくすこと」が求められた「忠君愛国」の時代であったためであろう。

このような背景から全国的に顕彰されてきた忠犬ハチ公の知名度は今でも高く、平成27年3月に東京大学農学部で開催されたハチ公没後80周年記念講演会には筆者も参加したが、農学部の正門近くに上野博士とハチ公の記念銅像が新たに建立されている。⁵⁷⁾

以上で述べてきたことから、ハチ公は主人の帰りを待ちつづけた忠犬として今でも有名であるが、顕彰理由の根幹が揺らいでいるため、残念ながら動物愛護史の研究対象から除外せざるを得ない現状にある。これらのことは全てハチ公を擬人化して有名な忠犬に仕立て上げた人の側の問題であり、ハチ公自身には全く責任がないことは言うまでもない。

さらに付言すれば、ハチ公が有名になった経緯からお分かりのとおり、忠犬という言葉はハチ公のためにつくられたことから、ハチ公は「義犬」ではないが「忠犬」であることに変わりはない。なお、新潟県五泉市や新潟市に銅像がある「忠

犬タマ公」は、有名になった当時のハチ公にあやかって忠犬と名付けられたが、⁵⁸⁾飼主やその仲間を命がけで二度も救ったタマ公の行為は明らかに義犬である。⁵⁹⁾

5 あとがき

筆者が発表するまではほとんど知られていなかった古い犬塚を、長年にわたって全国規模で百数十カ所も調査するという無謀な挑戦をはじめたのは、江戸時代初期の先祖で大村藩家老の小佐々市右衛門前親の大型墓の隣に並んで建つ「ギケンハナマル(義犬華丸)の墓」と伝えられる小型の墓石に興味を抱いたのがきっかけである。その結果、この墓碑が日本最古の史実の犬塚であることや、ヒューマン・アニマル・ボンドの歴史からも世界的に貴重な史跡であることが判明した。大村市の本経寺の墓所は、キリスト教から仏教へと転換した江戸時代の宗教政策を表す文化財として、本堂などの建物群と共に平成16年に国史跡に指定された。これに伴い、三代藩主純信墓の前にある小佐々前親と義犬華丸の墓も国の史跡として末永く保存されることになった。^{1,2,18)}

平成27(2015)年6月には、地元の大村市や関係民間団体により義犬華丸365回忌顕彰実行委員会が結成されて記念講演会などの顕彰事業が行われた。同時に、筆者が会長を務める大村藩士小佐々氏子孫の会により、本経寺の本堂前広場に顕彰記念として「義犬華丸顕彰墓碑」と「義犬華丸石像」が新たに建立されて、前親と華丸の365回忌の法要が執り行われた(写真3)。最近では愛犬家や観光客が訪れて、追悼のために義犬華丸石像を撫でて行くという。²⁰⁾ 本稿により、義犬の歴史という視点から、日本の動物愛護史や日本人の動物観を考えるきっかけになれば幸いである。

終りにあたり、筆者の現地調査や史料収集などに協力いただいた関係各位と共に、貴重な犬塚の顕彰・保存活動を続けている各地の皆様に対して、深甚なる謝意を表する次第である。なお、本稿は平成27年12月12日に順天堂大学で開催された医学系六史学会合同例会での講演内容に加筆したことを付記する。



写真3 365回忌法要記念に建立された義犬華丸顕彰墓碑と義犬華丸石像
(大村市本経寺)

6 文献および註

- 1) 小佐々学：日本愛犬史—ヒューマン・アニマル・ボンドの視点から—, 日本獣医師会雑誌, 66, 1(2013)
- 2) 小佐々学監修：義犬華丸ものがたり, 長崎文献社(2016)
- 3) 小佐々学：第2章 獣医史学, 池本卯典ほか監修 獣医学概論, 緑書房(2013)
- 4) 後述するように, 日本最古の犬骨の出土例は縄文時代早期の約9,500年前とされるが, 家畜である犬は人と共に移動していたことから, 日本列島へは縄文人か, それ以前の後期旧石器時代人と一緒に渡来したと推定される。
- 5) 金井弘夫：地名レッドデータブック, アポック社出版局(1994)
- 6) 村山忠重：別冊歴史読本・日本の苗字ベスト三万, 新人物往来社(2003)
- 7) 小橋次郎右衛門 犬之書 乾・坤(1616), 宮内庁図書寮文庫所蔵
- 8) 伊藤一美：宮内庁図書寮文庫所蔵「犬之書」と犬医療行為の歴史, 日本獣医史学雑誌, 54(2017)
- 9) 動物愛護という言葉は, 明治35(1902)年に広井辰太郎牧師が英国を見習って設立した「動物虐待防止会」が, 明治41(1908)年に「動物愛護会」に改称されたときにつくられた日本特有の言葉である。欧米ではキリスト教の教義により人以外の動物には靈魂がないとされ, 動物虐待が日常的に行われていた反省から, 動物虐待防止, 動物福祉, 動物権利などの活動が論理的, 科学的, 客観的に進められてきた。一方, 日本でいう動物愛護は, 神道のアニミズム的な感性や仏教の教えによる動物への憐憫の情にもとづいており, 情緒的, 主観的で権利や責任が明確でないため, 欧米では理解しにくい言葉である。
- 10) 小佐々学：犬塚関係調査報告, 日本獣医史学雑誌, 38・39・40・41・43・44・45・47 (2001~2010)
- 11) 秋本吉郎校注：播磨国風土記, 風土記, 岩波書店(1994)
- 12) 井上光貞監訳：日本書紀 下, 中央公論社(1987)
- 13) 小佐々学：播磨国風土記の品田天皇の狩犬麻奈志漏の墓, 日本獣医史学雑誌, 38 (2001)
- 14) 小佐々学：日本書紀の捕鳥部萬の白犬墓, 日本獣医史学雑誌, 38(2001)
- 15) 小佐々学：伝説・伝承の犬塚, 日本獣医史学雑誌, 41(2004)
- 16) 松浦静山著 中村幸彦・中野三敏校訂：甲子夜話2, 平凡社(1977)
- 17) 小佐々学：慶安三年銘小佐々市右衛門前親の愛犬墓, 日本獣医史学雑誌, 34(1997)
- 18) 小佐々学：国の史跡になった小佐々市右衛門前親と愛犬華丸の墓, 日本獣医史学雑誌, 43(2006)
- 19) 日本獣医学人名事典編纂委員会編：小佐々前親, 日本獣医学人名事典, 日本獣医史学会(2007)
- 20) 小佐々学：大村の義犬華丸と動物愛護史, 長崎倶楽部51号, 長崎県人クラブ(2016)
- 21) 小佐々学：史実の犬塚二題 (1)牧野忠辰の義犬「かふ」の墓, (2)オールコックの愛犬「トビー」の墓, 第79回日本獣医史学会研究発表会要旨(2015)

- 22) 丸田亀太郎編纂責任：白狗の碑「義犬」，長岡市史(1931)
- 23) 伴喜内著 一(逸)物成る犬之事，越之風車，新潟県立歴史博物館蔵
- 24) 小佐々学：天明7年銘 加藤小左衛門の義犬墓，日本獣医史学雑誌，44(2007)
- 25) 中丸和伯校注：関八州古戦録，卷之五，新人物往来社(1976)
- 26) 須賀川市教育委員会編集兼発行：須賀川市史・近世(1980)
- 27) 須賀川市教育委員会編集兼発行：郷土須賀川・須賀川市史別巻(1981)
- 28) 鎌田道隆：お伊勢参り，中央公論新社(2013)
- 29) 松浦静山著 中村幸彦・中野三敏校訂：甲子夜話5，平凡社(1978)
- 30) 松尾信一・白水完児・村井秀夫：日本農業全集60 畜産・獣医，農山漁村文化協会(1996)
- 31) 小佐々学：嘉永六年銘 横田三平の義狗墓，日本獣医史学雑誌，39(2002)
- 32) 熱海名主代々手控抜書 今井半太夫，熱海市立図書館蔵
- 33) 平野龍之介：義人釜鳴屋兵七とオルコック愛犬物語，熱海漁業協同組合(1962)
- 34) オールコック著 山口光朔訳：大君の都・中，岩波書店(1962)
- 35) 小佐々学：明治二年銘 島津随真院の愛犬墓，日本獣医史学雑誌，40(2003)
- 36) 小佐々学：明治九年銘 小篠源三の義犬墓，日本獣医史学雑誌，45(2008)
- 37) 港区伊皿子貝塚遺跡調査団編：伊皿子貝塚遺跡，日本電信電話公社・港区伊皿子貝塚遺跡調査会(1981)
- 38) 菊水健史・永澤美保・外池亜紀子・黒井眞器：日本の犬一人とともに生きる，東京大学出版会(2015)
- 39) 共同訳聖書実行委員会：旧約聖書・創世記，聖書，日本聖書協会(1989)
- 40) 松田毅一 E.ヨリッセン共著：フロイスの日本覚書，中央公論社(1983)
- 41) ルイス・フロイス著 岡田章雄訳註：ヨーロッパ文化と日本文化，岩波書店(2003)
- 42) 本居宣長撰 倉野憲司校訂：古事記伝，岩波書店(2003)
- 43) 西洋の一神教的世界観と日本のアニミズム的感性を論述して国際社会における現代文明を解説した以下の書も参考にした。
上野影文：現代日本文明論一神を呑み込んだカミガミの物語一，第三企画(2006)
- 44) 板倉聖宣：生類憐みの令一道德と政治，仮説社(1992)
- 45) 塚本 学：生類をめぐる政治，平凡社(1993)
- 46) 丹羽 巧：生類憐れみ政策の地域的展開，皇学館論叢35,5(2004)
- 47) 池澤聖明：「生類憐みの令」と「動物の愛護及び管理に関する法律」との比較，日本獣医史学雑誌，43(2006)
- 48) 根崎光男：生類憐みの世界，同成社(2006)
- 49) 林正春編・発行：ハチ公文献集，理想社印刷(1991)
- 50) 千葉雄著・発行：忠犬ハチ公物語一ハチ公は本当に忠犬だった，大館孔版社(2007)
- 51) スタンレー・コレン著 木村博江訳：犬があなたをこう変える，文藝春秋(2011)

- 52) 白根記念渋谷区郷土博物館・文学館発行：特別展ハチ公(2013)
- 53) 中山裕之 内田和幸：新たに判明した忠犬ハチ公の死因について，日本獣医史学雑誌, 49(2012)
- 54) 仁科邦男：忠犬ハチ公はこうして誕生した，動物文学70,2(2004)
- 55) 東京大学大学院農学生命科学研究科編著：農学・21世紀への挑戦，農学ユニーク紳士録，世界文化社(2000)
- 56) 平岩米吉：恩を忘れるな(昭和十年四月・子供の詩研究)，私の犬，築地書館(1991)
- 57) 一ノ瀬正樹・正木春彦編：東大ハチ公物語，東京大学出版会(2015)
- 58) 綾野まさる：奇跡の犬タマ公ーハチ公もびっくりの忠犬がいた，ハート出版(2009)
- 59) 小佐々学：忠犬タマ公，日本獣医史学雑誌, 47(2010)

Summary

History of Dog Graves and Animal Welfare in Japan

KOZASA Manabu¹

Dogs are the first domesticated species in history and are thought to be the first domestic animals brought to Japan. Archaeological evidence suggests that the domestication of dogs started as early as 9,500 years ago (the Jomon era), which was estimated by the excavated bones of dogs at the Natsushima Midden site in Kanagawa. Fossilized dog bones were excavated also at the Kamikuroiwa Rock-shelter site in Ehime. Based on a radiocarbon dating analysis, these bones were estimated to be 7,200-7,300 years old. The dogs were buried with great care for their memory as human beings. These results suggest that Japanese people have treated dogs with some respect as companion animals since ancient times and have built partnership with them for hunting and an early alarm system.

In the present paper the author focused on graves of “giken” (faithful dog) to clarify the concept of animals and attitude toward them in Japan. The term “giken” can be defined as the dogs faithfully serve their owners even with the risk of their lives. Indeed, some gikens lost their lives for their loyalty. The owners of gikens usually built graves for their dogs to mourn and console their spirit. The episodes of gikens and their burials can be found as old as in the 4th-5th centuries. As there was little cultural influence from the Western in those days, the giken graves should reflect unique and original aspects of Japanese culture.

On a basis of a survey on more than 100 dog graves, which are called “Inuzuka” in Japanese, the author classified the dog graves into four categories:

(1) Inuzuka in books and historical documents, (2) inuzuka in folklore, (3) inuzuka with historical evidence, and (4) inuzuka in the archaeological sites. An example of Inuzuka in books and historical documents can be found in “Harimanokuni Fudoki” (Topography of Harima Province) and “Nihonshoki,” (Chronicle of Japan). According to Harimanokuni Fudoki, the giken grave was built from 4th to 5th century. In nowadays the old grave turned to be a shinto shrine for local people to visit there for worship. The grave of Prince Shotoku’s dog can be an example of inuzuka in folklore. With regard to inuzuka with historical evidence, the graves of “Giken Hanamaru” (Hanamaru the faithful dog) should be the most remarkable. Akichika Kozasa, Chief Retainer of the Omura Clan, kept Hanamaru as his companion dog and Hanamaru’s grave was built in 1650 in Honkyoji Temple in Omura city, Nagasaki after Hanamaru’s death. This grave was the oldest one among the graves with historical evidence in Japan, perhaps in the world as well. In fact, it was built 35 years before the Edicts on Compassion for Living Things (Shorui Awaremi no Rei) in Japan and 222 years before the grave of Bobby was built in Greyfriars, Scotland (The grave of Bobby is believed to be oldest grave of dog with historical evidence in the Western countries). As the grave of Hanamaru was built just next to his owner with a long and warming message inscribed to the tombstone, this can be taken as a historic hallmark of human animal bond. In addition, the author introduced four graves of dogs in the site of Daienji Temple, Tokyo, as examples of inuzuka in the archaeological sites.

The graves of dogs have longer history in Japan than in Western countries. Compared with the grave of Bobby in Scotland, which was buried outside of the churchyard without tombstone in 1872, the dogs in Japan, particularly gikens, were buried with great care as companion animals even in the 4th -5th centuries as was implicated by Harimanokuni Fudoki. With regard to the grave with historical evidence, the dog’s grave with tombstone was built in 1650 and still exists as a historic site, such as the grave of Hanamaru. The difference between Japan and the West may be attributed to the religious background. In Japan Shinto and Buddhism should have great influence on the concept of animals and attitudes toward them, particularly with regard to death and mourning, while Christianity should in the West.

I. KOZASA Manabu

President, The Japanese Society of Veterinary History

Correspondence to : KOZASA Manabu 328-1 Futtono, Minuma-ku, Saitama-shi, 337-0017, Japan